

## 2025年度 日本語プログラム開発事業報告会 報告

2026年3月21日(土)13:00-16:00  
オンライン 参加者184名 (お申込み231名)

### <主旨>

本ユニットでは、国内で日本語を学ぶ子どもたちのための日本語のプログラムを開発する事業を行っています。小・中・高等学校の日本語学級・国際学級、また、地域の日本語・学習支援団体等に提供し、日々の教育・支援活動にご利用いただける日本語プログラムを開発し、提供することを目的としています。本報告会では、中間報告として、2025年度の成果についてご紹介いたします。(高等学校に関しては、2024年までにガイドライン・プログラムと実践例の一部を公開)

小学校、中学校、高等学校、地域の指導・受入体制・仕組みに応じて選択し組み合わせられることを重視して、プログラムを開発しています。また、選択し組み合わせ、実施する先生や支援者がカスタマイズできるように工夫しています。このプログラムを、子どもが母語の力、生活・学習経験、教科等の既有知識・技能等を生かしながら日本語を学ぶ教育活動として、活用いただければと思います。

報告会では、分科会1を小中学校部会、分科会2を高等学校部会とし、それぞれプログラム開発の考え方、今年度作成したプログラムと活動例の紹介、グループでの交流・話し合いを行います。

### ープログラムー

13:00-13:10 開会 挨拶:見世千賀子(東京学芸大学)

13:10-13:25 全体説明 齋藤ひろみ(東京学芸大学)

13:30-15:30 分科会(分科会1と分科会2に分かれて行います)

<分科会1>小中学校部会 <分科会2>高等学校部会

①プログラム開発の考え方

②プログラムの紹介(作成したユニット・活動案の紹介)

③グループディスカッション(意見交換)

※テーマを設定して小グループで現状と課題、プログラムについて話し合います

15:35-15:50 全体会・まとめ

<分科会1>吉田彩子さん(板橋区立板橋第八小学校)

<分科会2>佐屋麻利子さん(神奈川県立相模向陽館高等学校)

15:50-16:00 閉会 挨拶:市瀬智紀(宮城教育大学)

……………各分科会プログラム……………

<第1分科会> 小中学校部会報告

全体進行:原瑞穂・齋藤ひろみ(東京学芸大学)・河野俊之(横浜国立大学)

グループ活動説明:原瑞穂(東京学芸大学)、司会:開発委員

- 13:30~ 小中学校における日本語プログラム開発の基本構造とその考え方  
谷啓子・米本和弘(東京学芸大学)
- 13:50~ ユニット・活動案紹介  
トピック型プログラム 活動・ユニット案「給食1・2」授業案  
藤川美穂さん(横浜市立南吉田小学校)  
技能・タスク型プログラム 活動・ユニット案「意見文を書く」授業案  
築樋博子さん(元豊橋市教育委員会)
- 14:15~ 実践事例の紹介  
トピック型の活動 実践例「学校生活から広げる日本語学習 保健室で他」  
柏木めぐみさん(新宿区立大久保小学校)  
トピック型の活動 実践例「私の物語を語ろう」  
青山岳史さん(可児市立蘇南中学校)  
技能・タスク型の活動 実践例「お礼の手紙を書く」  
渡邊順子さん(葛飾区立新小岩中学校)
- 14:50~ グループ活動 意見交換会  
15:20~ グループでの話し合いの報告  
15:30 分科会 閉会

<第2分科会> 高等学校部会報告

全体進行:市瀬智紀(宮城教育大学)・小西円・見世千賀子(東京学芸大学)

グループ活動説明:佐屋麻利子さん(神奈川県立相模向陽高等学校)

司会:開発委員

- 13:35~ 高等学校のプログラムの全体像  
佐藤紘司さん(茨城県立石下紫峰高等学校)
- 13:50~ 活動・ユニット案紹介  
プログラムA 生活のための日本語「校則」  
青木由香さん(荒井学園高岡向陵高等学校)  
プログラムC 技能別日本語「私の引越しトランク」  
川上さくらさん(大阪府立大阪わかば高等学校)

## プログラムC 技能別日本語「自己アピールを書こう」

五十嵐恵美さん(愛知県立御津あおば高等学校)

14:30～ グループ活動 意見交換会

15:05～ 話し合いの報告・全体での話し合い

15:30 分科会 閉会

### 日本語プログラム開発事業報告会を振り返って

東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット（ユニットC）では、日本語プログラム開発事業として、日本語教育を単なる語学のトレーニングではなく全人的教育であると考えてプログラム開発を進めてきました。これまで、日本語プログラムでは、「目指す子ども像」が不明確であったこと、また、学校段階、年齢段階を超えた連続的な学びが実現できておらず、分断がみられることから、目指す子ども像を明確にすることと、子どもの将来を見据えて、切れ目のない日本語教育を行うことを意識化したプログラムの提案を行っています。

今回の報告会で示されたプログラムでは、人とつながることで学校や社会生活における文化適応とコミュニケーションを促進する活動・ユニット案を多く示すことができました。また、小中学校部会トピック型の活動実践例「保健室」（柏木めぐみさん：新宿区立大久保小学校）は、低学年の活動ではありますが児童の在籍学級にとどまらず、学校内の施設資源を活用して他者と関わる学習内容でした。技能・タスク型の活動実践例「お礼の手紙を書く」（渡邊順子さん：葛飾区立新小岩中学校）も、人とつながることでコミュニケーション能力を育てようというものです。高等学校部会プログラムA「生活のための日本語」の活動・ユニット案「校則」（青木由香さん：荒井学園高岡向陵高等学校）は、高校の校則を捉え直す活動で、シティズンシップ形成に繋がる内容となっています。

もう一つの特徴として、アイデンティティ形成・自己実現をはかることでキャリア形成・社会参加を促進するプログラムを提案している点を挙げられます。小中学校部会トピック型として紹介した実践例「私の物語を語ろう」（青山岳史さん：可見市立蘇南中学校）や高等学校部会のプログラムC「技能別日本語」の活動・ユニット案「私の引越シトランク」（川上さくらさん：大阪府立大阪わかば高等学校）、同「自己アピールを書こう」（五十嵐恵美さん：愛知県立御津あおば高等学校）は、自身とその出身背景を見つめ、自身の背景を他者に語ることで、日本語の形式面にのみ拘泥すると自己肯定感を涵養しにくいという問題を解決するものになっています。

本ユニットの提案するプログラムの二つの特徴は、実は、これまでにない新しいものだというわけではありません。従来から、日本語指導や外国人児童生徒等教育の実践においては、多様な言語的文化的背景を尊重し、かれらの自己肯定感や居場所づくりを視野に入れ、他者との関係づくりやキャリア教育に関わる取り組みは行われてきました。ただ残念なことに、それが各教育単位（学校や教室）で、日本語教育の明確な方針としてプログラムあるいは教育課程（カリキュラム）として構造的に設計されているところがまだまだ

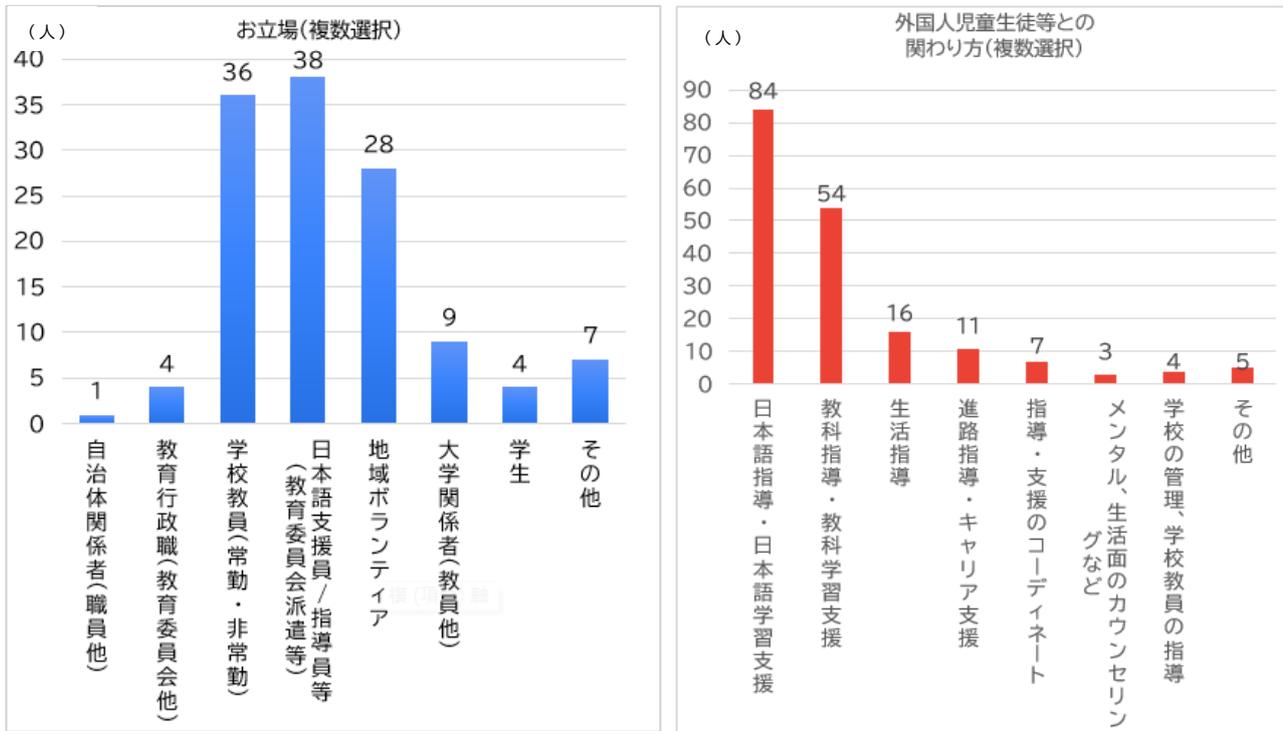
少ないこと、組織的にこのような日本語教育を実践するには認識の共有がまだ十分には進んでいないこと、そして、言語教育に関する経験的な知識（言語の形式面の知識を注入・記憶するタイプの方法）では、理念や考え方をもっていても具現化できないということが課題であったと考えられます。そこを何とかブレイクスルーするために、本ユニットでは、プログラム（学習項目群・一覧）と活動・ユニット案という形で、具体的な提案をすることにしました。

グループ意見交換会では、上述のような「人とつなげる 自分に目を向ける」といった日本語プログラムの方向性に多くの賛同が得られました。今後もその方向性に基づき、学習項目群（一覧）から選択した項目を組み合わせてパッケージ化したプログラム例を示すなど、多様な現場の多様な経験をもつ教員・支援者の方が、その状況・ニーズに応じて活用できるようにしたいと考えています。次年度も、コンテンツの開発を継続しますので、引き続き関心をもって、私たちの Web サイトや活動を覗きに来てください。

本ユニットメンバー 市瀬智紀（宮城教育大学）・齋藤ひろみ（東京学芸大学）

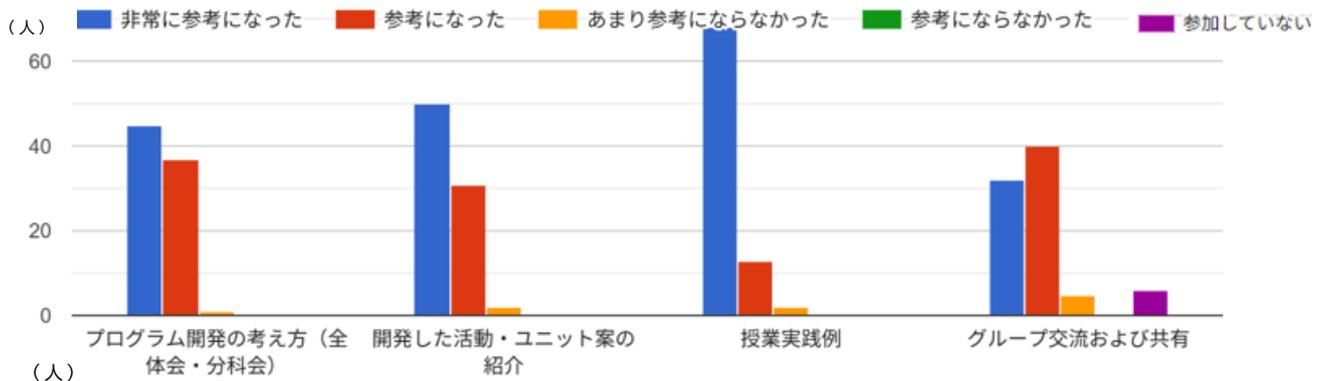
……………＜アンケートより＞……………

(参加者 184 人、回答 100 件、回答率 54.3%)



満足度「参考になったか」

小中学校部会



自由記述より

各先生方のお話や写真、児童・生徒の作品を見せていただいたことで、授業の様子が具体的にわかりました。その後、改めて先生方の活動案を拝見すると、より理解することができました。

先生方が作られた活動案をヒントに、自分の現場でできる活動を考えたい(できそうだ)と思えました。

初めて参加させていただきました。現場の状況、活動の思いを伺い、活動プログラムのプランのご紹介を拝見し、とても参考になりました。トピック型による学習項目が、教科のみならず、人と人

をつなぎ、子どもの学校の生活の場で実践できる学びに繋がることにも大きな発見でした。ありがとうございました。

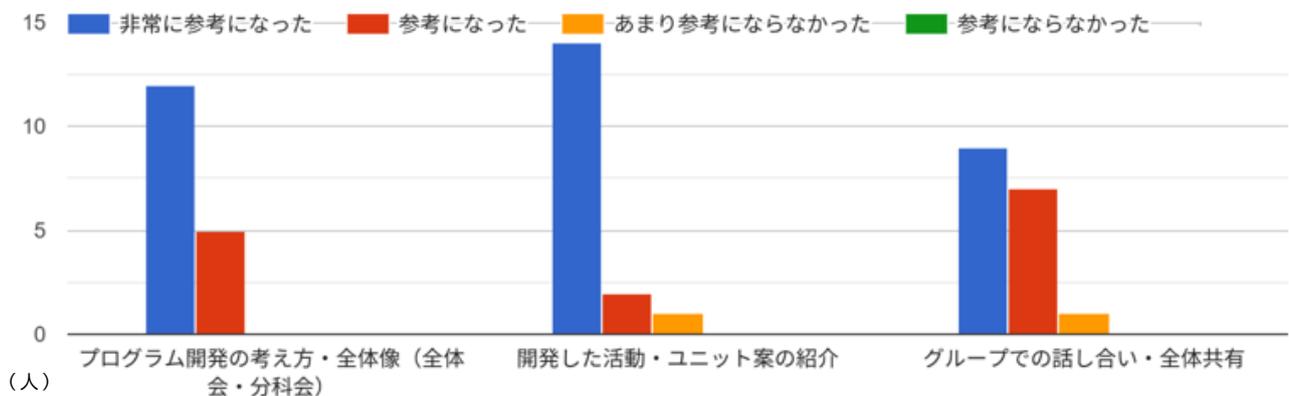
授業実践と目標設定、活動計画案と授業案の作成について具体的で今後の指導で早速活用させて頂きたいと思いました。また、現場で活躍されている先生方の実践や研究に関するお話が聞ける機会をいただけて大変嬉しいです。

給食についての目標など、既に類似の活動を行なっておりましたが、献立表などのレアリアを使用し、現実的に役に立つ活動などは大変役に立ちました。ありがとうございました。

目指すべき生徒像をまず設定するというのは目から鱗でした。その時その日に追われて支援していた自分を反省しております。

グループ交流で、実際にどう授業に生かすかが分かった。いろんな立場の人がいて、参考になった。

### 高等学校部会



### 自由記述より

属人的から組織化へとのことをお聞きして、ちょうど今、自分の所属しているところでも検討していたところでした。どの部の担当が変わっても、学校として変わることなく継続していける組織にしていけたらと思っていました。分科会では、経験の豊富な先生方からご意見を聞かせていただけてありがたかったです。

「目指す生徒像」は現在の教育内容で目指せるのか、というグループに参加させていただきました。ご経験のある先生方の「退学せずに単位修得をすることの難しさ」や「評価の難しさ」等、実体験を通してお話された内容は、高校での日本語指導一年目の私にとって大変参考になりました。

日本語プログラムをどのようにカリキュラムに位置づけ、どう活用できるかということをいつも考えながら学校支援をしていますが、それぞれの立場で自己実現やキャリア形成にかかわる取り組みをされていることをお聞きし、改めてその重要性を確認しました。どう高等学校で実践できるか、学校全体の取り組みにできるのか、模索しながら構築していきたいと思えます。

単に日本語“を”教えるのではなく、何かのテーマを通して日本語“も”教える、という視点を改めて学ばせていただきました。

プログラム開発の考え方等において、目指す子ども像の設定から、日本語教育の役割を明確にし、その上で、目の前の生徒に対してどのような活動が考えられるかという視点を確認できた。

ことばの力のものさしができることで発表対象レベルがイメージしやすくなった。日本語レベルと学齢に応じた成長、学校適応と自己肯定感などさまざま配慮する事項があり、狙いがブレやすいところ、選択可能なメニューが示されて生徒に応じて考えていける点が素晴らしいと感じた。特別の教育過程は本来個別に設計されるべきところ、実際はそうになっていないことを知り、学習評価の難しさという重大な課題を感じられた。